

聖書：創世 44：1～34

説教題：あの子の代わりに

日時：2024年6月23日（朝拝）

前の章の最後でヨセフとヨセフの兄弟たちはともに食事をし、楽しみました。ヨセフの兄たちはまだ目の前のエジプトの大臣がヨセフだとは分かっていません。ヨセフだけがすべてを知っています。そんな状況ではありましたが、彼らは一堂に会して和やかな食事の交わりの一時を持ちました。これは完全な和解の一步手前まで来たことのしるしでした。もはや一つになることなど不可能と思われた彼らが、こうして同じ部屋で親しく過ごすという奇跡なことが起こっていました。そしていよいよ今日の章でヨセフは自分を明かす前の最終的な確認の時、テストの時を持ちます。

ヨセフは家を管理する者に命じます。兄弟たちの袋に運び得る限りの食料を満たし、一人一人の銀を袋の口に置くように。そしてヨセフが使う特別な銀の杯を一番年下のベニヤミンの袋の口に代金と一緒に入れておくようにと。翌日、彼らは何も知らず、安堵の内にエジプトを出発します。無事、穀物を手に入れ、人質となっていたシメオンも連れ、そして何よりも父ヤコブが心配したベニヤミンも一緒に連れて、祖国カナンに向けて旅立ちました。ところがほどなくしてエジプトから追手がやって来ます。そして「なぜ、おまえたちは悪をもって善に報いるのか」と責めます。兄弟たちは何のこともさっぱり分かりません。ヨセフの家の管理人が言うように、ヨセフが使う銀を盗むわけがない。そこで彼らは9節で答えました。「しもべどものうちで、それが見つかった者は殺してください。そして、私たちもまた、ご主人の奴隷になります。」そして順番に取り調べが始まりました。年長の者から始めて年下の者で終えました。そして何とその杯が一番下の弟ベニヤミンの袋から見つかりました！彼らは自分の衣を引き裂きます。最も起こってはならないこと、最悪のことが生じました。彼らは再びエジプトへ引き返します。

ヨセフの家に来た時、ヨセフは彼らに問いました。「おまえたちの、このしわざは何だ。私のような者は占いをするというを知らなかったのか。」ヨセフはもちろん意地悪をしているわけではありません。彼はここで究極のテストをしようとしています。この後、ベニヤミンだけをエジプトに残すと話したら兄たちはどうするのか。そのためにまず彼らを責めます。それに対してユダが代表して答えました。16節を讀ん

で皆さんはどう思われるでしょうか。ユダは「あなた様に何を申し上げられるでしょう」と言って強く弁解しようとはしていません。この状況でいくらそれを試みても難しいと判断する思いがあったのかもしれませんが、それにしても「神がしもべどもの咎を暴かれたのです」という言葉はどう捉えたら良いのでしょうか。自分たちはやっていないのですから、やっていません！とここはあくまで主張すべきだったのではないかとある人たちは思うかもしれません。しかしここまで読んで来た方ならお分かりの通り、ユダは今回のことを言っているのではないのです。ここで彼が言う「しもべどもの咎」とは何のことでしょう。その中心にあったのは 20 年以上前にヨセフを奴隸として売り飛ばしたことです。彼らは前回エジプトに来た時、スパイの嫌疑をかけられて三日間監獄に入れられましたが、その時、42 章 21 節で互いにこう言い合いました。「まったく、われわれは弟のことで罰を受けているのだ。あれが、あわれみを求めたとき、その心の苦しみを見ながら、聞き入れなかった。それで、われわれはこんな苦しみにあっているのだ。」 彼らは自分たちが不当とも思える苦しみにあった時、同じように自分たちがかつてヨセフを苦しめた時のことを思い出しました。そしてこれはあの時の自分たちがしたことに対する神からの罰なのだを受け止めました。今日のユダの言葉もその延長線上にあると考えられます。彼らはあの時のことはあの時のこと、今回のことは今回のことと切り分けて、今回自分たちが受けているわざわいの不当性を訴えるということをしませんでした。むしろ神がこうして我々の咎を問題にしておられると受け止めたのです。ヨセフもユダがかつての出来事を指してこう言っていることは理解したでしょう。彼も先の 42 章 21 節の兄たちの言葉を聞いていました。彼はこうして兄たちがかつての行いを深く心に留め、反省していることを知りました。

しかしヨセフはここで究極のテストをします。ユダは 16 節で「ベニヤミンばかりでなく、私たちもあなた様の奴隸となります」と言いましたが、ヨセフは 17 節でこう言いました。「そんなことをするなど、とんでもないことだ。その手に杯が見つかった者、その者が私の奴隸となるのだ。おまえたちは安心して父のもとへ帰るがよい。」果たしてこれに対して兄たちはどう応答するのか。先には兄弟の一人シメオンをエジプトに残して、他の兄たちが彼を見捨てるかどうかヨセフは試験しました。しかし今回取り残されるのはラケルの子ベニヤミンです。かつて兄たちは同じくラケルの子であるヨセフを憎み、彼を奴隸として遠くに売り飛ばしました。それとそっくりの状況がここに再現されています。兄たちが相変わらずラケルの子であるベニヤミンを邪魔者扱いしているなら、彼をここに残してカナンに帰ることができます。父には大臣が

そう言ったのだからと言って言い訳することができます。

その時、ユダが前に出て来て話し始めます。この彼の言葉が今日の章最後まで続きます。まず彼は前回エジプトに来た時のことを振り返りました。あの時、あなた様はしもべどもに父や弟がいるかとお尋ねになり、その弟を連れて来いと言われました。その時、私たちは「それはできません」と申し上げました。彼の兄は死に、同じ母の子は今やベニヤミンだけで、父は彼を愛しています。その彼がいなくなったら父は死ぬでしょうと申し上げました。しかしあなた様が「末の弟と一緒に下って来なければ、二度と私の顔を見てはならない」と仰ったので、私たちは父にそのお言葉を告げました。そして今回エジプトに来るにあたって、父ヤコブとどのような会話をしたかを次に述べます。父はこのように言ったとユダは 27 節以降で述べます。「おまえたちもよく知っているように、私の妻は二人の子を産んだ。一人は私のところから出て行ったきりで、きっと獣にかみ裂かれてしまったのだ、と私は言った。今に至るまで、私は彼を見ていない。おまえたちがこの子まで私から奪って、この子にわざわいが降りかかるなら、おまえたちは白髪頭の私を、苦しみながらよみに下らせることになる。」ここでもヤコブはラケルだけを自分の妻と思っているようです。27 節に「私の妻は二人の子を産んだ」とありますが、妻は他にもいたはずですが、しかしラケルだけを妻と考え、その子たちだけをいわばえこひいきしている父です。その内の一人はいなくなったので、残る最後の子が失われたら自分は苦しみながらよみに下ることになる。そのように父は言った。

これを述べた上で最後の 30～34 節にユダの訴えがなされます。彼はもしベニヤミンを連れ帰らなければ、父は死んでしまうでしょうと言います。父のいのちはあの子のいのちに結ばれていますからと。また自分は必ずあの子を連れ帰りますと父に約束し、あの子の保証人になっていますと述べます。そこでユダは 33 節で「どうか今、このしもべを、あの子の代わりに、あなた様の奴隷としてとどめ、あの子を兄弟たちと一緒に帰らせてください」と懇願します。そして最後にこの言葉で締め括ります。34 節：「あの子と一緒になくて、どうして私は父のところへ帰れるでしょう。父に起こるわざわいを見たくありません。」

このユダの執り成しの言葉の中に私たちは次の三つを知ることができると思います。一つは彼の悔い改めです。前回も触れましたように、20 年以上前にヨセフを奴隷

として売り飛ばそうと提案したのは他ならぬこのユダでした。父ヤコブにえこひいきされている姿を見て常日頃から怒り、腹立たしく思っていた者として、そのことをしました。そして父ヤコブは今もなおラケルから出た子ベニヤミンだけを愛しています。このヤコブの在り方には問題があると言わなければなりません。しかしだからと言ってユダは以前と同じことを繰り返しません。彼はここでベニヤミンを救い出すために自らをささげて執り成しています。ここにユダの悔い改めがあります。悔い改めとは単に心で悲しむこと、以前の行いが悪かったと思うだけのことではありません。それは心で始まることですが生活が変わることにまで現れなければなりません。ユダは神の前で自分たちがかつてしたことは悪であったと捉え直し、反省しました。ですから以前と同じ歩みをここで繰り返さないのです。ベニヤミンを見捨てることは簡単にできる状況でしたが、そのようにせず、むしろその反対の行動を取ったのです。ここに彼の悔い改めが目に見える形で示されています。

二つ目はユダの心を一番占めていた思いは何かということです。それは一番多く出て来る言葉に注目すれば分かります。その言葉は何でしょうか。それはおそらく「父」という言葉です。日本語訳で 16 回、原文で確認すると 14 回も出て来ます。ベニヤミンをエジプトに残すことは何よりも父をひどく悲しませることになる。私はそのようにだけはしたくないと父を思い、父のために自分の身を投げ出しているユダの姿があります。なぜユダはそんなにも父ヤコブを思っているのでしょうか。父ヤコブの態度が変わったのでしょうか。聖書を見る限りヤコブは変わっていません。相変わらずラケルの息子ばかりをあからさまに特別扱いしています。ユダを含めて他の子どもたちのことはほとんど無視しているような表現が目立ちます。ユダは自分よりベニヤミンを父は愛していることを十分過ぎるほど分かっています。としたら、こんな父には愛想を尽かして、ここでエジプトの大臣が言う通り、ベニヤミンを置いて行くのもやむなしとしても良かったのではないのでしょうか。しかしユダはそうしなかったのです。どうしてでしょうか。一つは前回の罪を悔い改めていたからでしょう。前回、彼は父がどう思うかは少しも考えませんでした。愛するヨセフを失うことがあれほど激しい悲しみを父にもたらすとは十分に考えませんでした。そのかつての悪を悔い改めた者として彼は同じ道を行きませんでした。今回彼は父の気持ちを良く考えていることが分かります。そしてこれと関係すると思われるもう一つのことは 38 章に記された出来事です。ユダはしばらく家から離れて生活した時、あの嫁のタマルとの事件を通して自らの罪を深く自覚する者となりました。またそのプロセスで彼自身、息子を二人

失いました。彼は自らも大事な息子を失うことを通して、同じく大事な息子を失った父ヤコブの悲しみをより深く理解できるようになったと考えられます。より父に同情し、よりその悲しみを敏感に感じることができるようになった。その経験から来る優しさをもって彼はここで父が悲しむのを私は見たくないと言っていると思われま

そして三つ目にこのユダの執り成しに見る大きな特徴は自発的な自己犠牲ということです。ユダの前には二つの道があります。一つはエジプトの大臣の言葉に従ってベニヤミンを置いて帰ることです。大臣の命令だからと言え言訳は立ちます。しかしそうしたら先程来述べているように、父は悲しみながらよみに下ることになります。もう一つの道はベニヤミンを救い出すために自分が身代わりになることです。これを受け入れてもらえるかももらえないかは分かりませんが、言うてみることはできません。もちろんこれはユダ本人にとっては良いことになりません。人間的に考えれば自分より愛されている兄弟が父のもとに帰り、父が喜ぶために自分が犠牲になるということは腹立たしいことです。なぜ私がこのような悪いくじを引かなければならないのか！と叫びたくなるころではないでしょうか。しかしユダは自分のことよりも父のことを思いました。彼はここで父の問題であるえこひいきのことは問いません。彼はただ父が悲しむのを見たくないと思っているだけです。彼の執り成しの最後の言葉、「父に起こるわざわいを見たくありません」は、彼の思いを凝縮した言葉です。彼は自分の幸いよりも父の幸いを優先して、進んでこの自己犠牲の道を選び取りました。それは父の悲しみを自分自身の悲しみとし、また父の幸いを自分自身の幸いとするという愛の心によって初めてなし得た選択でした。この言葉に接してヨセフの防御は完全に打ち破られることとなります。彼はたまたまなくなって、次の章でついに「私はヨセフです」と自らを明かすこととなります。

ここに見るのは神がユダに与えてくださった大きな変化です。ヨセフを売り飛ばす提案をし、また嫁のタマルと通じるというとんでもない罪を犯したユダが、その失敗の経験を活かし、他者への愛の心によって、自分自身のいのちさえも差し出すという驚くべき姿を示しました。多くの人々はここに将来のイエス様を先取りする姿があると見て来ました。ヨハネの福音書 15 章 13 節：「人が自分の友のためにいのちを捨てること、これよりも大きな愛はだれも持っていません。」まさにユダはその姿を示しています。またそのことにより、やがて来られるイエス様を指し示しています。そして実際、このユダから将来まことの王イエス・キリストが誕生することとなるのです。

ユダはそのような榮譽にあずかって行くのです。

私たちは今日の箇所から私たちをこのように造り変えることのできる神のみわざに自らもあずかる者となることを祈り求めるように導かれるべきではないでしょうか。私たちも過去に多くの失敗と大変な罪を犯して来た者かもしれません。しかしだからと言ってもうその人生は終わりではないのです。あのユダもそうでした。神はあのユダを悔い改めへと導き、彼を祝福してくださいました。同じように神は私たちをも悔い改めへと導き、祝福しようとしておられます。その神の働きかけを拒否し、今ここで悔い改めなければ、やがての最後の審判の日にそれが問われるだけです。それよりも今ここで悔い改めへと進み、神の祝福を受ける者となる方が良い。また私たちは過去に様々な悲しみや痛みを経験して来たかもしれません。しかしその悲しい経験、苦しい経験を通して、私たちは他の人の痛みや苦しみをもっと良く理解し、あるいは同情し、愛のためにその経験を生かすことができます。神がそのために私をこれまで鍛えてくださり、これからのために準備して下さったとさえ言えます。神がこのように私たちに働きかけ、ここまで導き、訓練して下さったことを感謝して、私たちは神から受けたこの学びを、その実りを、具体的な目に見える人間関係の中で発揮して行く者とさせられたいと思います。そして神のみわざのために尊く用いられ、この地上でも神の祝福を体験させていただく者となり、主の愛の御国を広げる者、また神の豊かな称賛と祝福を受ける者へと導かれたいと思います。